

## 『社会資本論』との出会い

1冊の本との出会いから話を進めたい。信州松本の地で大学生活を送っていたころ、文学や哲学、経済など、思いつくまま多くの古典を集中して読んだ。そのなかにカール・マルクスの『資本論』があり、哲学者の渡辺義晴先生の輪読会にも参加した。とにかく難解な書物であったが、何回か読むうちに徐々に理解できるようになった。

『資本論』に苦闘している時、たまたま松本城近くの古本屋の棚に宮本憲一『社会資本論』を見つけた。『資本論』の前に「社会」がつく変わったタイトルで、とにかく手にとってみた。ページをめくると公共事業、公害や都市問題などが書かれており、なんだか引きつけられるものがあった。



この本との偶然の出会いが、その後の私の人生を方向づけた。『社会資本論』は1967年に有斐閣から初版が発行されており、その2年後に出会ったことになる。とくに関心をもったのが、両大戦間アメリカの公共事業、戦後日本の社会資本充実政策批判、都市化と都市問題などであった。

卒業とともに大阪に移った。『社会資本論』の著者である宮本憲一先生のもとで研究したかったので、大阪市立大学の近くに下宿して、大学院のゼミを聴講させてもらった。2年間の苦難の「浪人生活」を経て、大阪市立大の大学院経営学研究科に入学できた。修士論文のテーマは、やはり『社会資本論』の影響を受けて「両大戦間アメリカの公共事業」とした。ジョン・モーリス・クラークの『公共事業計画化の経済学』などを読み、1920年代のニューヨークの都市・地域計画、1930年代のニューディール期の景気対策に焦点をあて、公共事業を分析した。

当時、宮本先生を代表として関西の研究者を中心に地域自治体問題研究会が組織され、学際的な共同研究が実施されていた。共同研究の成果は、筑摩書房から『大都市とコンビナート・大阪』『公害都市の再生・水俣』『開発と自治の展望・沖縄』の3部作として出版された。修士論文に追われ、共同研究の執筆には加われなかったが、科学研究費など研究会の事務局を長らく務めた。



これは5年前「最終講義ノート」をもとに書いた原稿冒頭をすこし修正したものである。退職してから5年経ち、なんだか懐かしくなり、レポートで紹介したくなった。それと宮本憲一先生と若い研究者らによる『現代社会資本論』出版企画に参加することになり、『社会資本論』を再読しているためだ。

(2019年4月7日)